

モンゴル文学に描かれた力士像

岡田和行

モンゴル系の人びとはモンゴル語だけでなく、古くはチベツト語、さらには中国語(漢語)やロシア語で作品を書いてきたし、ドイツ語、あるいは日本語や英語で書かれた作品もある。しかしながら、モンゴル文学とはやはり「モンゴル語による文学作品」と規定するのが妥当であろう。しかし、モンゴル語で「書かれたもの」だけをモンゴル文学と定義することはできない。モンゴル文学は長らく「声」のある文学だった。声によって表現され伝承されてきた、音楽性豊かな「口承文芸」と呼ばれる言語芸術が、モンゴル文学の中で重要な位置を占めてきた。

モンゴル口承文芸の中に、ボヒーン・ツォル (*bökhin tsol*) あるいはボヒーン・マグタール (*bökhin magtaal*) というジャンルがある。モンゴル語のボヒーンの「ボフ (*bökh*)」は日本語で相撲の「力士」を、「ツォル」や「マグタール」は讃える歌、つまり「讃歌」を意味する。その力士の出身地、これまでの戦歴、その優れた体力や能力などを讃える韻文形式の作品で、現在でも、ナーダムと呼ばれる祭典の相撲大会などで朗詠されている。

広大無辺の草原で
慈悲深き主人の庇護のもと
吉祥の勝利をめざす
盛大な祭典で
金翅鳥ガルーダが羽ばたくように
大鷹が飛ぶように
互いに取っ組み合い
満場は歓喜に包まれる……

一三世紀に成立した『モンゴル秘史』(漢訳名『元朝秘史』)という古い文献がある。チンギス・ハーンの生涯を中心に描いた英雄叙事詩的な年代記であり、「擬似歴史小説」とも言われる作品で、歴史資料としてだけでなく、言語、文学、民俗学の資料としてもきわめて重要な文献の一つである。この『モンゴル秘史』にブリ・ボコという力士が登場する。「ボコ (*bökö*)」は前述のモンゴル語「ボフ」の古い形で「力士」という意味である。ブリ・ボコは強い力士だったが、チンギスの弟のベルグテイと相撲を取ってわざと負け、結局、背骨をへし折られて殺されてしまうという逸話が、『モンゴル秘史』第一四〇節に記



述されている。このブリ・ボココそモンゴル文学に描かれた最初の力士像なのである。

私が専攻しているモンゴル国(旧モンゴル人民共和国)の近代文学の中では、モンゴル相撲そのものをテーマにした小説はあまり多くないが、まず思い浮かぶのは、ドジョーギーン・ツェデブ(一九三九)という作家の『五回戦 (Tavyn davaa)』という小説である。ツェデブはかつてモンゴル作家同盟議長をとめ、東京外国語大学客員教授、モンゴル国立文化芸術大学長もつとめた著名な人物で、「文化功労者」の称号も授与されている。そのツェデブが一九七六年に発表した『五回戦』という小説は、別名「赤い絹の襦袢ズボツを着けた力士 (Ulaan Khamban zodog)」とも呼ばれており、ナサンという年若い力士が主人公の物語である。小説の中で時代は明示されていないが、一九二一年の革命後の話で、七月一日の革命記念日のナードムで相撲大会が行われたウランバートルのボヤント・オハーという場所(ここには現在チンギス・ハーン空港がある)が舞台となつている。小説はアルスラン(獅子)の称号を持つ力士のナサンの回想をとどころに挟みながら、ナサンがナードムの相撲大会の一回戦から四回戦まで若い力士を破って順当に勝ち上がってゆく姿が生き生きと描かれている。そしてナサンは五回戦に勝ち進み、ウブルハンガイ県という地方出身のやはりアルスラン(獅子)の称号を持つツォードルという若い力士を指名して対戦する。モンゴル相撲の全国大会での五回戦というのは、これに勝利すると、これまで称号のなかった力士には称号が与えられ、すでに称号のある力士には新たな称号がつけ加えられる重要な取組なのである。年若い力士のナサンが

ツォードルという若い力士を指名した理由は、ツォードルが前年の夏のウブルハンガイ県のナードムの相撲大会でナサンを侮辱するような言辞を吐いたからである。結局ナサンは五回戦でツォードルを見事に打ち破り、ナードムに集まった人びとから拍手喝采を浴びることになる。要するに、この小説が訴えたかったことは、モンゴル相撲の力士の大切な資質の一つは、年若い先輩力士に常に敬意を払うことにあるということである。このしきたりに反した傲慢なツォードルのような若い力士は、たとえ強くても、人びとの尊敬を集めることはできないということなのだ。

その他の小説については、紙幅の関係で、簡単に紹介するだけにとどめたい。一九八八年に国家賞を受賞した作家シャラビン・スレンジャブ(一九三八)が一九九一年に発表した小説『ヘルレン河の終点 (Kherlengin barai)』は、モンゴル相撲の有名なアブラガ(横綱)のボヤントグトフ(別名ボヤント)の生涯に題材を取ったもので、モンゴルの力士の卓越した体力と能力、その道徳的な気高さを歴史的・芸術的な手法で描いたものである。スレンジャブはまた、モンゴル相撲の力士を主人公にした有名な芸術映画「ガリド・マゲナイ (Garid magnai)」(一九八三年公開、その後日本でも「偉大なタカ」の邦題で公開された)の脚本も共同執筆している。またザガリン・サンダガー(一九二七〜一九八一)という作家が一九七三年に発表した『雄の灰色の大鷹 (Er bor khartsaga)』は、ザーン(象)の称号を持つバトという若い力士の運命を描いた小説で、力士の生活や家族の問題、力士の持つ優れた体力や能力などが描かれている。邦訳もある学術作家ツェンディーン・ダムディンスレン

(二九〇八〜一九八六)の一九六五年に発表した短編小説「トランクを開ければ (Chendantai yun)」(松田忠徳・蓮見治雄・荒井伸一編訳『帽子をかぶった狼』、恒文社、一九八四年所収)の最後に登場する年老いた力士は、夫と友人を裏切った主人公の女性ツエーマーに向かつて、若いころ対戦相手の多くの力士に危険な技をかけては怪我をさせてきたが、「わしがどんなに悪どい人間だと言っても、自分の知っている仲間を傷つけるようなひどいことは、まずしたことがないよ」と述懐している。

このように、モンゴルの小説に描かれた力士の人間像は、穏やかで誠実な人柄、飾り気のない質素な生活などによって特徴づけられていると言えよう。またモンゴル相撲の儀礼、伝統、しきたりなどの肯定的な側面が鮮明に描かれていて、モンゴルの人びとにとって力士とは、たぐい稀なる体力と能力を持つ、心優しき人びとであることがわかる。逆に言えば、肉体的には強くても、優れた資質と規律を持たない力士、先輩力士を敬わない傲慢な力士は、否定的な人間像として描かれている。

今回このような題目で寄稿したのは、現在センセーショナルに報じられている「日馬富士暴行事件」をめぐる、日本の大相撲のモンゴル人横綱の「品格」問題が声高に論じられていることに触発されたためである。与えられたテーマとは少し異なるテーマとなってしまうが、お許し願いたい。